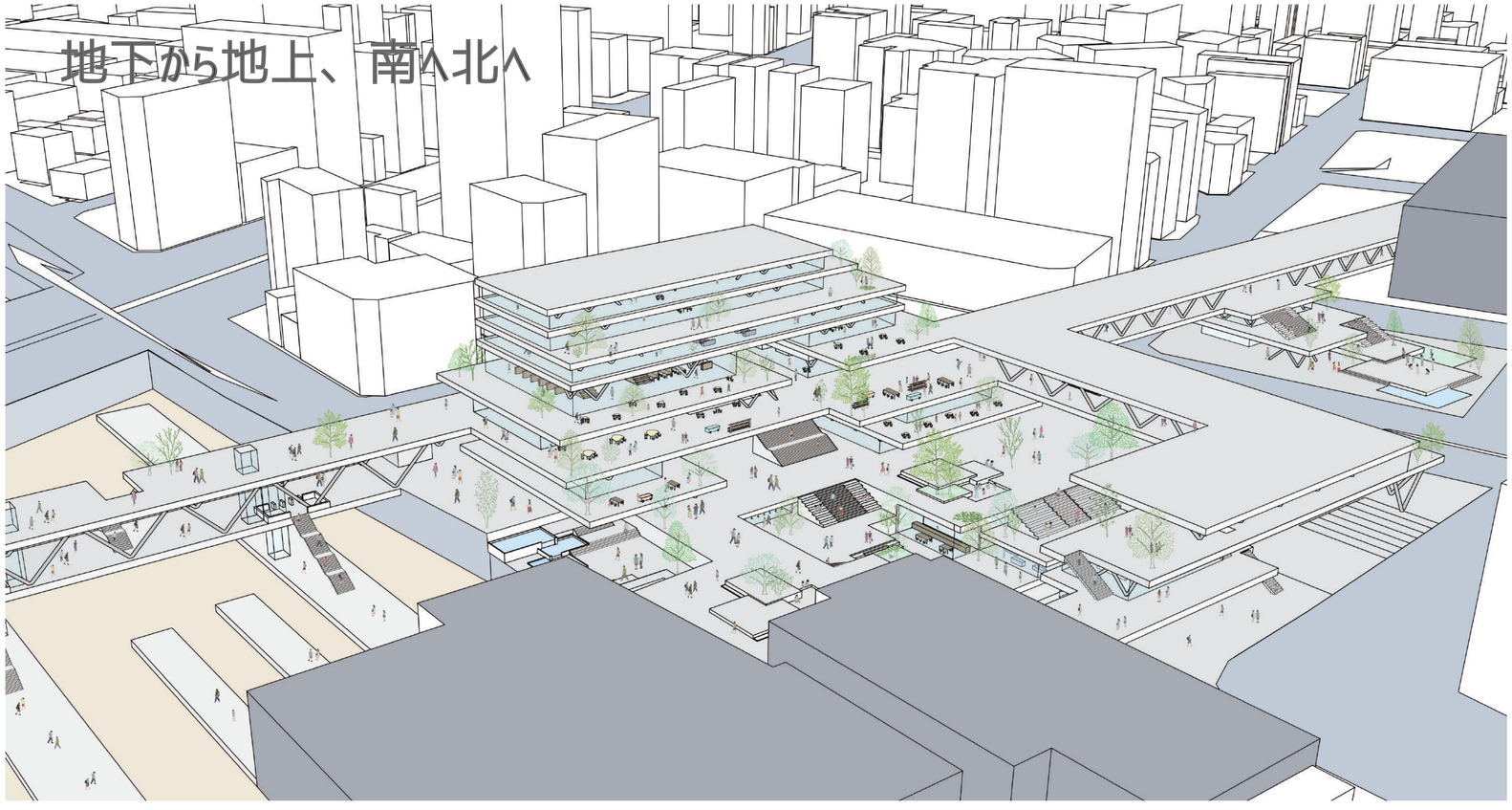
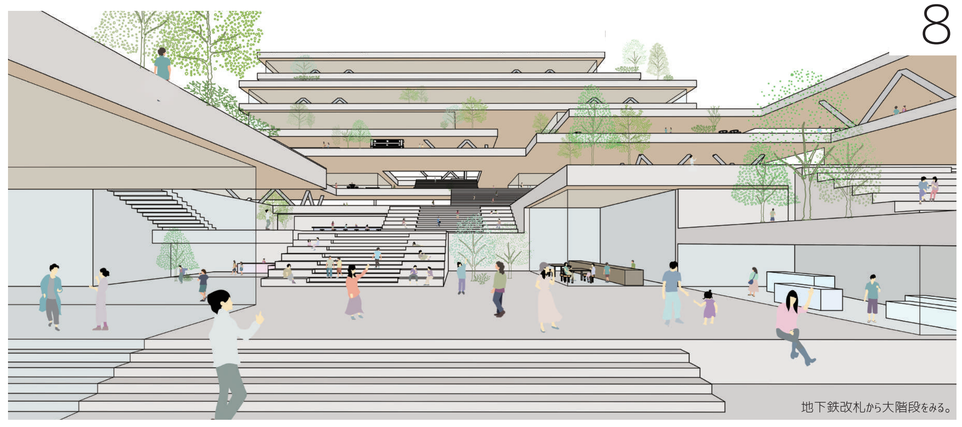
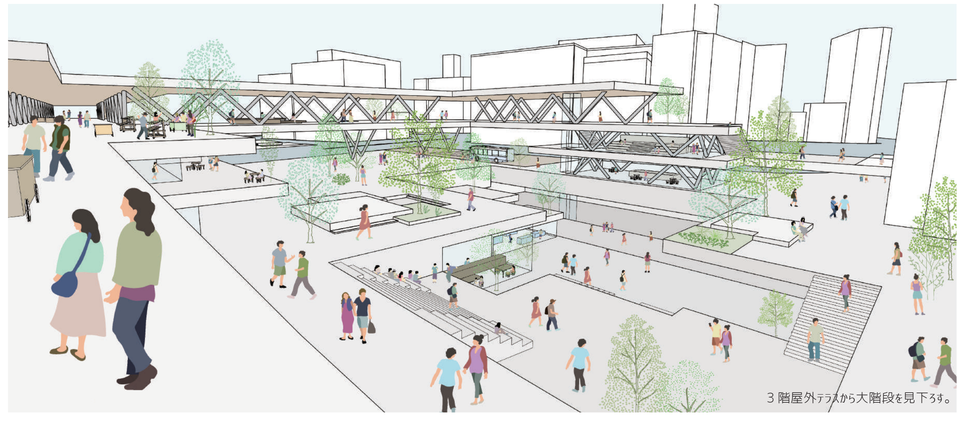
# 地下から地上、南へ北へ

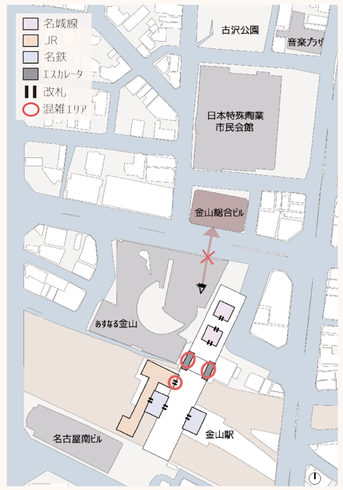




地下鉄改札から大階段をみる。



3階屋外テラスから大階段を見下ろす。




## 金山の現状

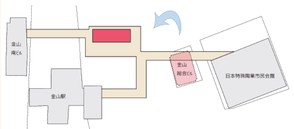
①金山駅の北には日本特殊陶業市民会館がある。駅から徒歩4分とアクセスがよく、金山を象徴する文化施設である。名古屋の他劇場（zepp nagoya、名古屋国際会議場、ポートメッセなごやなど）は、駅から遠いことも多く、周囲に他施設があることも少ない。
そういった点で金山は、まちと文化施設が連動する可能性を秘めたまちだといえる。
しかし現在、金山駅と日本特殊陶業市民会館のつながりは、駅と市民会館の間に立つ金山総合ビルによって断ち切られている。

②金山は名古屋市民会館、金山南ビル（旧名古屋ボストン美術館）、音楽プラザがあり、文化の拠点として成長してきた。その一方で金山駅は乗換駅としてのイメージが強く、実際は文化のまちとして根付いていない。

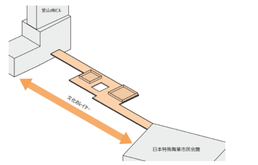
③金山駅は名鉄、JR、地下鉄名城線、名港線が通るターミナル駅であり、利用者が多い。しかし、JRは改札が一箇所、地下鉄への動線はエスカレーターでの出入口が二箇所のみであるため、常時混雑している。

④駅周辺は金山公園、古沢公園があるが、他のまちと比べ、緑が乏しい状況である。

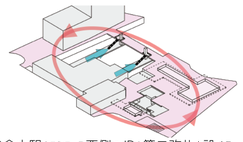
## 設計コンセプト



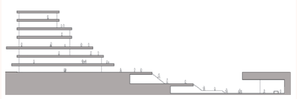

①金山総合ビルをアスナル敷地西側に移築する。日本特殊陶業市民会館、金山駅、金山南ビルをペデストリアンデッキで繋ぐことで、新たな人の動きを生み出す。また、市民会館は改築後の予想配置とする。



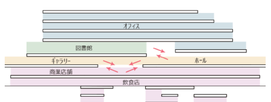

②そのペデストリアンデッキにギャラリー、ホールを配すことで、文化を体験できる空間を作り出す。



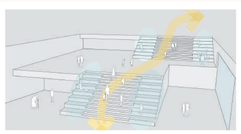
③金山駅のコンコース西側にJRの第二改札を設ける。人の流れを分散させることで、JRの混雑を防ぐ。また、線路が地上レベルより低い金山の特徴を活かし、南北間を繋ぐことで地上の回遊性が向上する。



④地下鉄の改札と、移築後のボリュームを大階段でひと繋ぎにすることで、混雑を緩和させつつ、立体的な人の移動を生み出す。

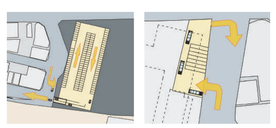



⑤店舗、図書館、オフィス、屋外広場の機能の融合を目指す。階層によって機能を分けながら、スラブをずらして配置することによって、スラブ間での異なる活動が垣間見え、新たな交流を生み出す。

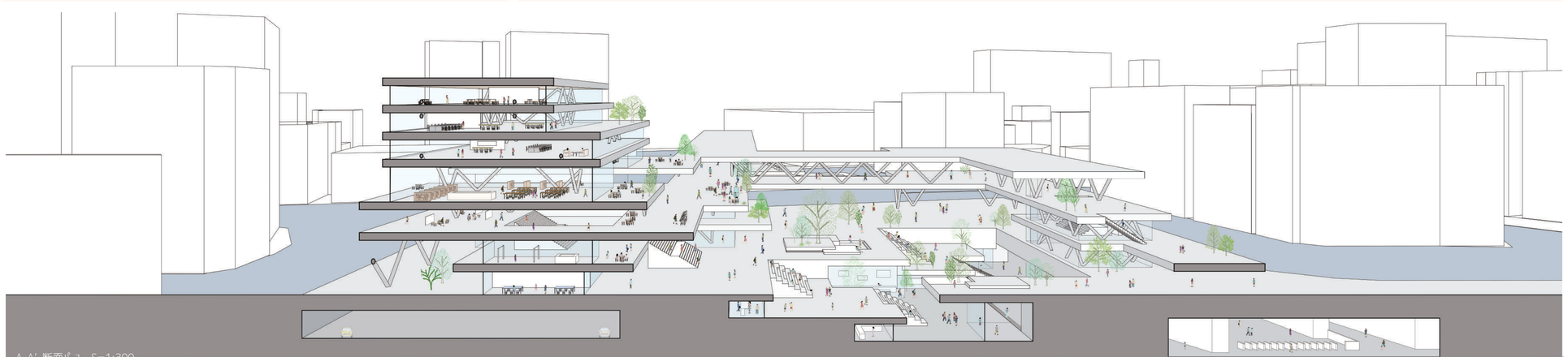


⑥大階段、ペデストリアンデッキの移動空間に滞留空間を混在させる。金山を歩く人が店舗に入らずとも休憩できる場所を設けることで、通過するだけのまちから立ち止まりたくなるようなまちへと変化を与える。

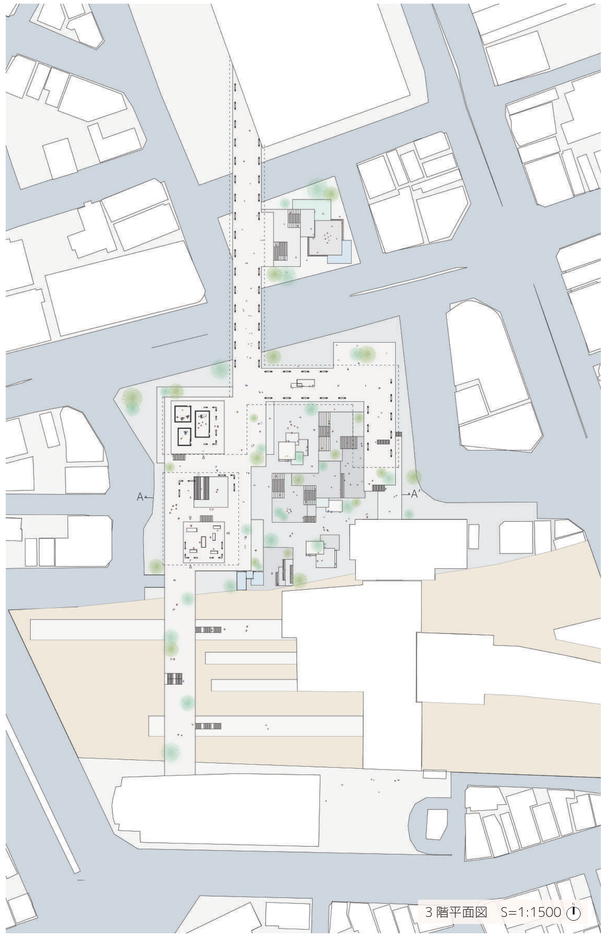
⑦さまざまな広さの屋外テラスをつくる。木々を屋外テラスに組み込むことで、自然を感じながら、本を読んだり、開催されたイベントを楽しんだりすることができ、駅周辺に賑わいが滲み出る。



⑧以前あった立体駐車場を移築後のボリューム地下に移動させる。地上に屋外空間を増やすと共に、視線の妨げをなくす。
ペデストリアンデッキの軒下を通ることで、雨に濡れることなくバスロータリーにたどり着くことが可能となる。



A-A' 断面パース　S=1:300




3階平面図　S=1:1500